森林レンジャーがゆく　(61)

タヌキの農耕の起源

タヌキは、昔から人との関わりがとても深い動物です。多くの昔話や民話に登場することからも、その関わりの深さが分かりますが、現在でも、農業被害という形で人との関わりが続いています。

我が家でも、タヌキとの関わりがあります。庭の隅の生ごみコンポストを訪れて、中身をあさり、生ごみを散らしていきます。我が家では、コンポスト容器の周りにレンガやブロックを積み上げてあされないように細工するなど、知恵比べの連続です。そんな折、ブロックのバリケードが破られて、生ごみがあさられました。偶然か故意か、近くの落ち葉ためにカボチャの種を持っていったようで、そこからカボチャが１つ発芽して育ち始めました。この場所は、腐葉土が堆積しているため、十分な肥料により、とても元気に育っていきました。品種は、「雪化粧」という野性味の強い優良品種で、通常はその特性を引き継がないことが多いのですが、生育は旺盛で勝手に育ち、雄花が咲き、遅れて雌花が咲いて結実に至りました。そして、全部で10個ほどのカボチャができました。

我が家では、８月の終わりにおいしそうなカボチャを４個ほど収穫して食べてみました。「タヌキのカボチャ」は、それなりにおいしく、育てたタヌキに感謝をして頂きました。そして不思議な事に、我が家で収穫した後、すぐに残ったカボチャにタヌキの歯形が付きました。カボチャを食べるのではなく、それこそ「自分が育てたカボチャだ！」と、怒ったように歯形を付けて回った感じでした。要は、自分のカボチャに唾を付け、自分の物だと主張した行動だと理解しています。タヌキにしてみれば、自分の育てたカボチャが人間の食害に遭ってしまったわけです。これらのことから、タヌキは定期的に自分のカボチャの見回りをしていたようです。また、未熟な果物には手を出さずに収穫期を待っていたとしか考えられない行動です。

人間の農耕の起源も、食べ残しから偶然に発芽した食物が育つのを見て始まったと思えば、このタヌキがとった行動は、農耕そのものだと思います。この野生動物らしからぬタヌキの行動が、擬人化しやすく「タヌキが人を化かす」といわれるゆえんかと思っています。

（杉野）